

世界遺産アカデミー特別講座 隔週連載第2回 『ルネサンスとは何か？』

前ユネスコ事務局長顧問 服部 英二

【イスラームがギリシアの学を中継、西欧に伝える】

また、ルネサンスを古典文芸の復興、そして文化活動の隆盛と捉えれば、12世紀、アンダルシアやシチリアに興った「12世紀ルネサンス」も注目に値します。西ローマ帝国滅亡に始まるヨーロッパの中世においては、ヨーロッパは完全に内向きでした。東に東方正教会、西のイベリア半島にはイスラーム王国が君臨し、北アフリカもイスラームの勢力が席捲しています。北は、バイキングが勢力を堅持しているような状況が、ヨーロッパの中世です。

この時代、富と情報、そして人が集中したのはイスラームの文化圏でした。

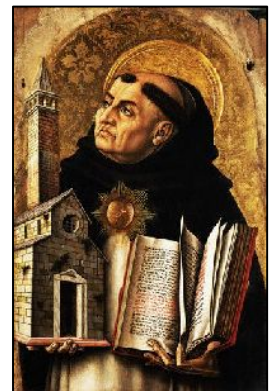
8世紀頃から、アッバース朝の首都バグダッドは勿論、イベリア半島のコルドバ・トレド、シチリア島のパレルモ、北アフリカ・チュニジアのケルwaan、さらにはコンスタンチヌープル等では文化学術活動が活発で、世界の文化センターのような存在でした。ギリシアの学問はアラビア語に翻訳され、確実にイスラームの世界に浸透していきます。このような状況の中、トレドではアラビア語からラテン語に翻訳する翻訳グループが活躍を始めます。ギリシアの学問が、アラビア語からラテン語に翻訳され、ヨーロッパに波及し始めます。パレルモの宮殿でもアラビア語やギリシア語がラテン語に翻訳されます。アンダルシア、シチリアを発信源とする12世紀ルネサンスです。

この時代のヨーロッパにおける文化の隆盛には、イスラームやビザンツの力は不可欠でした。

【中世スコラ哲学】

さらに言えば、13世紀、パリの神学校ソルボンヌにおけるスコラ哲学は、イベリア半島でアラビア語からラテン語訳されたアリストテレスの哲学をベースにしていました。パウロやアウグスチヌスから続く神学に、アリストテレスの自然学と形而上学を援用することで、水と油のように背反するもの、信と理性、の合成を目指したのです。その代表はトマス・アキナスによる神学の大成の著、「Summa Theologiae=神学大全」でしょう。このトマス・アキナスの大著は、長らくヨーロッパ思想の中核を形成していくのですが、この大業の背景にはイスラームの存在が不可欠だったわけです。

時代は進み、15世紀のイタリア・ルネサンス、16世紀のフランス・ルネサンスの時代を迎えるのですが、アリストテレスに代表される古代ギリシアの理性の再発見は、スコラ哲学の基盤を成し、ヨーロッパの中核に理性を据えていくのです。ルネサンスの基本理念の一つ「Humanism」は、人間をすべての事象の中心に置く「人本主義」でもあり、それは、人間を「神に見られる存在」から「神を見る存在」へ転換させたことを意味します。さらに言えば、「Communion=神との合体」から「Perception=神の認識」への転換です。



『トマス・アキナス』

【自己解体するヨーロッパ】

このように、ギリシア的理性がルネサンスを喚起する中、ユダヤ・キリスト教のトーラは宗教改革を指向します。I. Wallerstein(ウォーラーズテイン)のいう15世紀中盤から17世紀中盤まで続く「長い16世紀」が創り上げるヨーロッパ中心的世界市場と、平野啓一郎さんが「日蝕」で表現した「聖性の崩壊」は、後期スコラ哲学が掲げた二重真理説の登場と崩壊を意味します。

【単なるギリシアの復活にあらず】

また、ルネサンスは文芸復興とも捉えられます。塩野七海さんは、文芸復興と言っても、単なるギリシアの復活では無かった、と言っていますね。古代ギリシア哲学では、人間の活動を「テオリア=観照」「プラクシス=実践」「ポイエーシス=創作」に分け、高い精神性に基盤を置くテオリア、プラクシスを世俗的であるポイエーシスと切り離していましたが、ルネサンスでは、この3つが初めて合体したことを指摘しているわけです。レオナルドやミケランジェロのような巨人の誕生には、観照=本質を見極め、実践=倫理的実践を行える知識人が、

ポイエーシス＝創作にまで手を広げる、つまりはテオリア、プラクシス、ポイエーシスの合体があり、知識人が自然に手をつけるようになってきたことを意味します。

【近代ヨーロッパへの布石】



『フランシス・ベーコン』

この文芸復興は、近代ヨーロッパへの布石とも言えます。17世紀はじめ、イギリスの哲学者、フランシス・ベーコンはアリストテレスからスコラ哲学に及ぶ教義に対し、全知識の改革を目指す中で帰納法を重視します。ベーコンの帰納法では、「光をもたらす実験」を重視、経験から様々な事実を拾い集め、それらを知性で消化し、知識を造り出すことを目指します。何のための知識かというと、自然支配のための知識です。ベーコンは、国の中での支配拡張も人類の中での支配拡張(植民地政策)も品が無いと否定します。自然の中での科学技術＝知識による支配拡張こそ、人類の目指す方向だと提唱します。知識人が自然に手をつけようとする歴史の流れが見えてきます。このベーコンの考え方は、有限のパイを取り合うのではなく、パイ自体を拡張しようとするものであり、産業革命につながる考え方もあります。

ちなみに、テオリア、プラクシス、ポイエーシスに対する捉え方で考えると、中世以降、日本は、職人を重視することで中間層がいち早く近代化していくルネサンス以降のヨーロッパ型、中国は、貴人は手を汚さず、知は上流階級のもので、その知とは儒教の四書五経を大切に、という点で、古代ギリシア型と言えるかもしれません。

さて、このような近世ヨーロッパに科学革命が起こります。科学革命とは、17世紀に興る科学の大規模な変革であり、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ、ニュートンの登場です。つまりは、天動説の定着であり、ニュートン力学の誕生なのです。そして科学革命に重要な哲学的根拠を与えたのはデカルトです。

【科学革命は何故ヨーロッパという一地域にのみ起こったのか？】

人類史上の大きな革命、人類革命・農業革命・都市革命・精神革命等は世界各地で同時多発的に発生します。例えば、中国に孔子、インド、ネパール国境付近にゴータマ・シッダールタ、ギリシアにソクラテスが誕生するのは、ほぼ同じ紀元前6世紀のころであり、これなどは精神革命の同時発生した顕著な例と言っても過言ではないでしょう。

しかし、科学革命はヨーロッパという一地域にしか発生しませんでした。

何故なのか？

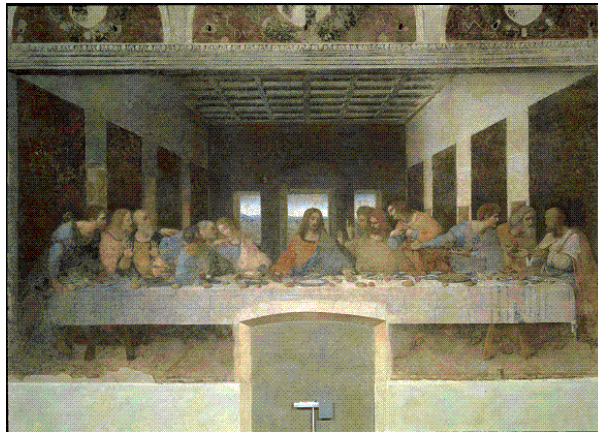
今まで検証してきたように、ヨーロッパにおいては理性と信仰の複雑な関係＝教会と自然科学の熾烈な争いが存在し、17世紀について科学が勝利をおさめるといった独自の歴史があったのです。18世紀末のフランス革命では、王権と共に教権をも葬り去ったことに注意しましょう。自由・平等・博愛といった近代市民主義の諸原理は、理性を重んじる啓蒙主義に拠るものであり、19世紀に花開く産業革命の成果は、その論理的帰結と言えるでしょう。

『方法叙説』は、1637年に公刊されたデカルトの著書です。方法叙説の第4部では、あの有名なCogito ergo sum「我思う故に我有り」という命題を提示しますが、第6部では「人は自然の主人にして所有者」という自然観を表しています。これが人間による自然支配への根拠となります。『方法叙説』の原題は「理性を正しく導き、もろもろの知識の中に真理を探究するための方法の叙説」ですが、客体となった自然の法則を操り、統御する根拠を与えました。科学革命が契機となり、理性と客観性を重視する科学の目は、自然を所有物として客体化させました。そして、大量生産・大量消費を基本とする産業の目は、人間さえも客体として数量化していきます。ここに存在＝to be から所有＝to have への価値の転移がみられます。

このようなデカルトに代表される17世紀の価値観の萌芽が、ルネサンスに見られることは、今までの検証で明らかでしょう。神の下僕たる人間から、主体として、個としての人間が誕生した時、視点が変わります。個の人間が、その確たる一点から対象物を見た時「遠近法」が誕生するのです。



『ルネ・デカルト』



『最後の晩餐(サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会)』

ルネサンスの代表作の一つ、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』。

そこに見る遠近法の作画技術は、ダ・ヴィンチの目を確たる一点として最後の晩餐を捉えています。すべての線が一点に向かって収斂していきます。こうしたルネサンス的視点の誕生は、神さえも一つの客体=Object としてしまいます。キリスト教にあっては恐れ多くて形象化出来なかった父なる神さえも老人の姿で描かれるようになります。中世ヨーロッパにおける信仰を基本とした社会の閉塞感は、ルネサンスを経験することで、大きく変わります。それは「文芸復興」「人間性の復活」とされますが、のちの啓蒙主義を準備するもので、自然や神さえも客体化してしまう価値観の転換の流れを造り出したと言えるのです。

キリスト教の本山であるバチカン宮殿が、この神さえも客体化する芸術で充ち満ちているのは皮肉なことです。パースペクティヴの技法は個としての個人の確立を示すものです。ちなみに日本の屏風絵や絵巻を見てみましょう。完全にパースペクティヴが欠如しています。一点に発ち対象を見つめる主体の存在は、日本の伝統には無かったのです。

ルネサンスとは反対に、日本の美術は「用の美」として装飾芸術で世界の頂点を極めて行きますが、このことについては、時を改めてお話ししましょう。



『ウイトルウィウスの人体図』

……第3回へ続く。

※画像データ出典:2011年5月28日(土)服部英二氏特別講演会資料より